

氏名	組原 慎子
学位の種類	博士 (社会デザイン学)
報告番号	甲第430号
学位授与年月日	2016年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	集団ではなく個として移住した 沖縄移民のアイデンティティ をめぐり考察 -ブラジル国クリチーバ市 における沖縄人(ウチナーン チュ)を事例として-
審査委員	(主査) 長 有紀枝 大熊 玄 砂川 浩慶 (立教大学社会学部 准教授)

I. 論文内容の要旨

(1) 論文の構成

論文題目：集団ではなく個として移住した沖縄移民のアイデンティティをめぐる考察

－ ブラジル国クリチーバ市における^{ウチナンチュ}沖縄人を事例として－

本論文は、本文（序章、第1章から第4章、終章までの全6章）、図表・写真一覧、参考文献、付録資料（クリチーバ市における^{ウチナンチュ}沖縄人の歴史年表、クリチーバ沖縄県人会会員リスト：2009－2013年、クリチーバ沖縄県人会メンバーによる沖縄料理のレシピ、^{ウチナンチュ}沖縄人アイデンティティに関する論文・文献リスト）を含め、全173頁からなる。

本論文の構成は以下の通りである。

はじめに	1
序章 なぜ個として移住した沖縄移民のアイデンティティなのか.....	3
1. 本論文の問題関心と背景	3
2. 本論文の目的と構成	4
3. 沖縄移民のアイデンティティ研究における本論文の意義と位置付け	7
4. 本論文の調査方法	8
5. 「 ^{ウチナンチュ} 沖縄人」の呼称について	8
6. ブラジル国クリチーバ市の表記について	11
第1章 ^{ウチナンチュ}沖縄人アイデンティティをめぐる考察	
－アイデンティティ研究の対象としての^{ウチナンチュ}沖縄	13
1. 多分野から研究される ^{ウチナンチュ} 沖縄人アイデンティティ	
(1) 5分野（心理学・社会学・民俗学／民族学・政治学・歴史学）における アイデンティティ研究の対象としての ^{ウチナンチュ} 沖縄	13
(2) 歴史からみるアイデンティティ研究の対象としての ^{ウチナンチュ} 沖縄	14
2. ^{ウチナンチュ} 沖縄人アイデンティティの歴史の変遷	
－ ^{ウチナンチュ} 沖縄人アイデンティティに影響のある4つの出来事	15
3. ^{ウチナンチュ} 沖縄人アイデンティティに影響のある風習・考え方からみる特徴.....	19
(1) 沖縄の風土的な影響－「イチャリバチョーデー（行き逢えば兄弟）」 に見られる海洋民族的特徴	19
(2) 沖縄の親族制度「 ^{ムンチュウ} 門中」の影響－親族を繋げる契機	21
4. 小括－アイデンティティは創られる.....	24

第2章 沖縄移民のアイデンティティをめぐる考察

—アイデンティティ研究の対象としての沖縄移民	26
1. 本論文における沖縄移民の定義	26
2. 沖縄移民の歴史と分布	27
(1) 戦前の沖縄移民 (1899年—1941年頃)	28
(2) 戦中の沖縄移民 (1941年頃—1945年頃)	31
(3) 戦後の沖縄移民 (1945年頃—1993年)	32
(4) 沖縄移民の分布	37
(5) 沖縄内外の ^{ウチナーンチュ} 沖縄人交流	38
①沖縄における「世界のウチナーンチュ大会」	38
②戦後における沖縄移民の沖縄救済運動への「返礼」と人材育成	40
3. 沖縄移民のアイデンティティに関する先行研究一	42
4. ブラジル沖縄県人会設立の動きにみる集団としての移民.....	48
5. 小括—沖縄移民の特徴と沖縄移民のアイデンティティ研究	49

第3章 クリチーバ市における^{ウチナーンチュ}沖縄人の流入の歴史

1. クリチーバ市における日系人の歴史	51
(1) クリチーバ市における日系人の流入—3つの要因	53
①戦争による海岸沿いからの立ち退き命令	53
②都市であるクリチーバ市への就学、就職の機会を求めて.....	53
③1975年頃に発生した霜害	55
(2) 日系人組織の変遷	55
①戦後の「勝ち組」「負け組」問題による影響	55
②クリチーバ学生連盟による日系人組織の歩み寄りの促進	57
(3) 2009年現在の日系人組織「クリチーバ日伯文化援護協会」.....	58
2. クリチーバ市における ^{ウチナーンチュ} 沖縄人の歴史	60
3. 個として移住した ^{ウチナーンチュ} 沖縄人の集団の結成過程：第1期—1957年を中心に <「親睦会」「 ^{たのもし} 頼母子」>	66
4. 個として移住した ^{ウチナーンチュ} 沖縄人の集団の結成過程：第2期—1959～1970年代を中心に <「親睦会」「 ^{たのもし} 頼母子」「クリチーバ沖縄県人会」>	69
5. 個として移住した ^{ウチナーンチュ} 沖縄人の集団の再結成：第3期—2006年を中心に <「 ^{たのもし} 頼母子」「クリチーバ沖縄県人会」>	71
6. クリチーバ市とはどのような地域なのか	81
7. 小括	84

第4章	クリチーバ沖縄県人会とアイデンティティ	86
1.	クリチーバ沖縄県人会としての再始動	86
	(1) ブラジル国における調査概要—クリチーバ沖縄県人会を中心に	86
	(2) クリチーバ市の ^{ウチナーンチュ} 沖縄人に出会った経緯と印象(2008年)	89
	(3) クリチーバ沖縄県人会メンバーの属性	90
	(4) クリチーバ沖縄県人会メンバーの属性—まとめ	91
	(5) クリチーバ沖縄県人会の活動	92
	① 定期の活動 — 「頼母子」など	92
	② 不定期の活動—沖縄料理教室など	93
	③ クリチーバ沖縄県人会から独立した活動—「琉球國祭り太鼓」	94
2.	4名の会長へのインタビューからみる ^{ウチナーンチュ} 沖縄人アイデンティティ	96
	(1) 2001～2005年度 マツダ・ノブテロ会長	96
	(2) 2006～2009年度 ウエズ・ジョージ会長	98
	(3) 2010～2011年度 ギノザ・マツオ・マリア会長	101
	(4) 2011～2014年度 ヒガ・エリオ会長	103
	(5) 4名の会長インタビューから見えること	107
3.	構成メンバーへのインタビューからみる ^{ウチナーンチュ} 沖縄人アイデンティティ	107
	(1) クリチーバ沖縄県人会と沖縄に対する考えからみる	108
	(2) クリチーバ沖縄県人会メンバーの特徴	112
4.	小括—「シンボルとしての沖縄」	119
終章	個として移住した沖縄移民のアイデンティティの再構築	122
1.	総括：クリチーバに移住した沖縄移民アイデンティティを支える	
	「シンボルとしての沖縄」	122
2.	クリチーバにおける ^{ウチナーンチュ} 沖縄人アイデンティティの今後の課題—次世代への継承	126
3.	本論文の今後の課題	127
図表・写真一覧		128
参考文献		130
付録資料 1.	クリチーバ市における ^{ウチナーンチュ} 沖縄人の歴史年表	141
付録資料 2.	クリチーバ沖縄県人会会員リスト(2009—2013年)	154
付録資料 3.	クリチーバ沖縄県人会メンバーによる沖縄料理のレシピ	161
付録資料 4.	^{ウチナーンチュ} 沖縄人アイデンティティに関する論文・文献リスト：5分野	168
謝辞		173

(2) 論文の内容要旨

本論文は、沖縄県出身の申請者が「集団」ではなく「個」として移住した沖縄移民のアイデンティティをめぐり、中南米やハワイでフィールドワークを重ね実施してきた研究の成果をまとめたものである。

本論文が対象とするブラジル国クリチーバ市は、集団で移住した初期の沖縄移民との直接的な関係を持たず、沖縄の血縁、地縁を越えて沖縄人が集う極めて特殊な地域である。このようなクリチーバ市の沖縄人アイデンティティの形成をみることによって、「個」として移住した沖縄人のアイデンティティが明らかになるのではないかと、という推論が本論文の出発点であり、問題関心である。

上記の問題関心に沿って本論文は、以下2点を明らかにすることを目的としている。第一に、「沖縄人アイデンティティ」と「沖縄移民のアイデンティティ」とは何かを明らかにすること、第二に、集団ではなく個として、第2、第3の地へ移住を重ねた沖縄人のアイデンティティの形成および変遷過程や変遷の要因を明らかにし、クリチーバ市における「沖縄移民のアイデンティティ」を明らかにすることである。

上記2つの目的を達成するため、本論文は6つの章から構成される。

序章では、本論文の問題関心と背景、目的と構成、沖縄移民のアイデンティティ研究における本論文の意義と位置づけ、調査方法について述べた後、複数の呼び名を持つ「沖縄人」の呼称について整理し、またクリチーバ市についての解説を行っている。

第1章「沖縄人アイデンティティをめぐるとの考察—アイデンティティ研究の対象としての沖縄」においては、歴史学の立場から沖縄人アイデンティティ形成過程の整理を行った。沖縄人アイデンティティは、日本における日本人アイデンティティとは別の研究対象とされてきた歴史があるが、その歴史的経緯と理由を考察した。沖縄人アイデンティティをめぐっては、様々な先行研究があるが、申請者は5つの分野に大別しどのような議論が行われてきたかを概観した上で、沖縄人アイデンティティの歴史的な変遷を分析したグレゴリー・J・スミッツ (Gregory James Smits、以下スミッツ) の研究を援用しながら、歴史的考察を行った。また、歴史的な展開以外の視点で沖縄人アイデンティティに関係すると思われる2つの特徴、すなわち、沖縄人同士の間で交わされる沖縄独特のフレーズ「イチャリバチョーデー (出会えば皆兄弟)」に見られる海洋民族の特徴と、沖縄独自の父系血縁の長男が位牌を守る親族制度「門中」の影響を挙げた。

第2章「沖縄移民のアイデンティティをめぐるとの考察—アイデンティティ研究の対象としての沖縄移民」においては、沖縄にとって移民とはどのような存在かを歴史的経緯を踏まえつつ、先行研究を整理し、研究の動向について概観した。また、沖縄移民の歴史と分布を整理し、時代の変遷とともに沖縄人アイデンティティそのものが変容を遂げ、沖縄人としてのアイデンティティが肯定的に捉えられるようになってきた過程を解き明かした。

第3章「クリチーバ市における^{ウチナーンチュ}沖繩人の流入の歴史」においては、まずブラジル国パラナ州及びクリチーバ市における日系人の歴史を概観し、クリチーバ市における日系人の流入は、少なくとも3つの要因から説明できるとした。即ち、①戦争による海岸沿いからの立ち退き命令、②ブラジル南部最大の都市であるクリチーバ市への就学と就職、③1975年頃に発生した霜害の3点である。次にクリチーバ市において日系人組織は複雑な変遷を経てきた背景を、①戦後の「勝ち組」「負け組」問題による影響と②クリチーバ学生連盟による日系人組織の歩み寄りの促進という2つの視点から説明した。その上で、2013年現在の日系人組織「クリチーバ日伯文化援護協会（「文協」または「日系人会）」の状況を概観し、ブラジル国パラナ州及びクリチーバ市における^{ウチナーンチュ}沖繩人の歴史に焦点を当てて議論した。また、クリチーバ沖繩県人会の前身を時系列的に3段階に分け、どのように^{ウチナーンチュ}沖繩人が集まってきたかを、「親睦会」とも呼ばれる^{たのもし}「頼母子」の1950年代から現在に至るまでの姿を通じて論じた。

第4章「クリチーバ沖繩県人会とアイデンティティ」においては、クリチーバ沖繩県人会メンバーの^{ウチナーンチュ}沖繩人アイデンティティの意識を把握するため、メンバーを運営側と一般の構成員という2つの類型に分け、それぞれ聞き取り調査をもとに考察を試みた。

終章「個として移住した場所における^{ウチナーンチュ}沖繩人アイデンティティの再構築とその後の課題」では、第1章から第4章の議論を通じ、クリチーバ市の沖繩移民をつないでいるのは、必ずしも同一とはいえない、個々の移民がそれぞれの内にもつ「シンボルとしての沖繩」であり、それが“接着剤”の役割を果たしていると結論づけた。

II. 論文審査結果の要旨

(1) 論文の特徴

申請者は、約10年にわたりブラジル、ボリビア、アメリカ（ハワイ）、など8カ国で、のべ100人以上の沖繩移民にインタビューし、そのアイデンティやネットワークについて研究を重ねてきた。その過程で遭遇し、強く興味関心を掻き立てられていったのが、ブラジル国クリチーバ市という特殊な土地で「集団」ではなく「個」として移住した沖繩移民のアイデンティをめぐる課題である。

申請者は、沖繩県豊見城市生まれの「ウチナーンチュ（沖繩人）」を母にもちながらも、父親が鳥取県生まれの「ヤマトンチュ（大和人）」あるいは「ナイチャー（内地人）」であったことから、幼少期より「ハーフ」と呼ばれ、成人してからは、沖繩の言葉で「マンチャー（血が混ざっているの意）」とも呼ばれることを知り、自身の沖繩人アイデンティを問い続けて成長した。そうした背景をもつ申請者が、長期のフィールドワークで可能となったインタビュー調査をもとに、ブラジル国のクリチーバ市の沖繩移民を対象に執筆したのが本論文である。クリチーバ市は、集団で移住した初期の沖繩移民との直接的な関係が無いにもかかわらず、^{ウチナーンチュ}沖繩の血縁、地縁を越えて沖繩人が集う極めて特殊な地域でありなが

ら、本論文が対象とする研究領域において、先行研究がほとんどみられない特別な地域である。申請者は2009年～2013年までの5年間に断続的ではあるが、計9ヶ月間現地に滞在し、クリチーバ市に居住する日系人や沖縄人の生活や文化に触れ、資料を収集するとともに、関係者に対するインタビュー調査を行い、その学術的な空白を埋めることに大きく貢献した。本論文の最大の特徴である。また、上記を考察するにあたり、沖縄において形成されてきた「沖縄人アイデンティティ」と、沖縄人によって移住先に持ち込まれ、その過程で変容し、あるいは新たに生じた移住沖縄人のアイデンティティを、「沖縄移民のアイデンティティ」と呼び明確に区別して論じた点も本論文の特徴である。

(2) 論文の評価

本論文は、2015年10月30日に提出され、2015年12月10日に第1回の博士論文審査委員会を開催した。第1回審査委員会において、本論文の全般的な質、全体に対する評価について意見交換を行うとともに、審査基準について審査委員間の合意が図られた。

続けて開催された第2回審査委員会において、本論文が、移民研究で空白となっていたクリチーバ市を対象とし、自らのフィールドワークの成果をまとめた独自性と「集団」ではなく「個」として移住した沖縄移民のアイデンティティに焦点を絞るという獨創性、「集団」と「個」に分けた枠組み設定の面白さについて高い評価が与えられた。しかしその一方で、本論文が結論とした「イメージとしての沖縄」が着想としては興味深いものの、それが具体的に何を指すのか解き明かされていない、「集団」と「個」という枠組み設定には成功したものの、結論としてその対比がなされていないといった結論部分に対する重要な疑問が提示された。また、詳細な年表を作成したにもかかわらず、本文に生かされていない、貴重な資料である沖縄料理のレシピなどをより活用すべきとの指摘がなされた。

こうした点は、申請者に伝えられ、第3回の公開審査会に向けて、論文の微修正が行われた。

2016年1月14日に開催された第3回公開審査会においては、申請者は審査委員会の指摘に対し、よく整理されたパワーポイント資料を用い、論文の目的、構成、特徴、成果、課題について非常に説得力のある、同時にわかりやすい約30分のプレゼンテーションを実施した。特に前回指摘を受けた「集団」と「個」については、集団移住者の場合は、所属や帰属意識が継承され、受動的に沖縄移民としてのアイデンティティが形成されるのに対し、個人の場合、所属が希薄化し、沖縄の伝統や文化、食事といった「沖縄」的なるものがシンボルとして機能し、それを他の沖縄移民と共有することにより、主体的にアイデンティティが再構築されるという論を展開した。

プレゼンテーション終了後、審査委員会から長年のフィールドワークに基づいた論文の

独創性や独自性、収集した資料の希少性、文献をよく渉猟したことへの評価が述べられる一方で、以下のような重要な指摘がなされた。

まず、クリチーバの沖縄移民の2世、3世がもつ沖縄人としてのアイデンティの前に、日本という概念、日本人としてのアイデンティがどのように捉えられていたかを明らかにする必要があったのではないか、クリチーバ市の特殊性に関し、申請者自身の言葉や説明のみならず、より客観的なデータで示す必要があるのではないか、「集団」と「個」の違いを述べるにあたって、サンパウロとクリチーバの違いについても述べるべきではなかったか、クリチーバという特殊な場所がアイデンティの形成に影響を及ぼした点はなかったかなどである。

これらの指摘、質問に対し、申請者は明快に意見を述べるとともに、本論文で明らかにできなかった、現段階における限界を将来の課題として受け止める真摯な姿勢で対応がなされた。

公開審査会終了後、同日1月14日、続いて開催した最終審査会において、改めて博士論文審査委員会は、本論文の移民研究、沖縄研究としての質の高さと独自性を評価し、審査の過程で指摘された諸課題は、むしろ研究者としての今後の可能性を示すものであると解釈し、全員一致で本論文を合格とするという結論に達した。

よって審査委員会はここに、本論文が博士（社会デザイン学）学位論文として相応しいものであることを、一致して承認することとする。